

2018年度 理論言語学講座 時間割(予定)										
	月		火		水		木		金	
前期	生成文法Ⅰ 【入門】【通年開講】 高橋 将一 青山学院大学准教授	社会言語学 嶋田 珠巳 明海大学教授	認知言語学Ⅱ 【通年開講】 池上嘉彦 東京大学名誉教授	音声学の基礎的知識 斎藤 純男 東京学芸大学教授	日本語文法理論 【通年開講】 尾上圭介 東京大学名誉教授	第一言語獲得 郷路拓也 津田塾大学准教授	生成文法Ⅱ 【特論】 今西典子 東京大学名誉教授	フィールド言語学 長屋尚典 東京外国語大学講師	文法原論 【通年開講】 梶田 優 上智大学名誉教授	日本語文法 受身文・ラレル文 川村大 東京外国語大学教授
後期	生成文法Ⅰ 【入門】【通年開講】 高橋 将一 青山学院大学准教授	認知言語学Ⅰ 西村 義樹 東京大学教授	認知言語学Ⅱ 【通年開講】 池上嘉彦 東京大学名誉教授	音声学の実践的技能 中川 裕 東京外国語大学教授	日本語文法理論 【通年開講】 尾上圭介 東京大学名誉教授	言語哲学 峯島宏次 お茶の水女子大学 特任准教授	語形成とレキシコン 杉岡洋子 慶應義塾大学教授	実験言語学 酒井弘 早稲田大学教授	文法原論 【通年開講】 梶田 優 上智大学名誉教授	意味論の基礎 酒井智宏 早稲田大学准教授
<ul style="list-style-type: none"> ● 面接ガイダンス 前期 2018年5月13日(日)13時～ 予定 後期 2018年9月30日(日)13時～ 予定 ● 前期講座スタート 2018年5月14日(月)～(全10回)※祝祭日休講 夜間講座全て 19:00-20:40 ● 後期講座スタート 2018年10月1日(月)～(全10回)※祝祭日休講 										
理論言語学講座夏期集中 8月10日(金)-12日(日) 語用論 松井智子 東京学芸大学教授 8月31日(金)-9月2日(日) 日本語文法と一般言語理論 三宅知宏 大阪大学准教授										

2018年度 理論言語学講座 概要

時間：19：00－20：40（100分）

前期 2018年5月14日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

月曜日

～基礎から学ぶ生成文法理論～

生成文法Ⅰ（入門）

高橋 将一
青山学院大学准教授

内容は通年講座(14頁)を参照。

～ことばの出会い—言語接触—から考える「言語とはなにか」～

社会言語学

嶋田 珠巳（しまだ・たまみ）
明海大学教授
【社会言語学】

社会言語学の重要な基礎を築いた William Labov (1972) に「私は長年 sociolinguistics という用語に抵抗してきた。社会が関係しないで成功している言語理論や実践があるということを暗に意味しているから」ということばがあります。linguistics は social であって初めて成りたつものだから、わざわざ socio-だ

んで邪魔っけだという思考です。言語が人の話すものである以上、そして人が社会的な存在である以上、言語の性質を明らかにする言語学は自明のこととして「社会 socio-」を内包しているはずで

たしかに、「社会」をなくしては、人間の言語活動は理解し得ません。では、その「社会」は、言語学にどのような視点や理解を与え、言語理論にどのように組み込むことが可能でしょうか。社会言語学とよばれる学問領域において諸々の興味深い研究がなされている一方で、その理論的整備はまだ開発途上にあり、それだけに多くの可能性が開けています。

講義においてはいくつかの研究を参照しながら社会言語学の基本的な考え方を紹介したうえで、今年度は、とくにことばの出会い、すなわち言語接触を中心に考察します。言語接触の諸現象に交錯する「言語」と「社会」の様相から、言語とはなにかを考察するというのが講義のテーマです。本講座担当者が取り組んできたアイルランドの事例などから、言語交替、接触による言語変化、言語政策、言語教育とコミュニティなどについて具体的に考え、そのうえで、受講生自身の研究課題ないし言語に関する諸問題を、あるいは日本の言語に関する諸問題を、前提となる知識をたがいに共有しながら議論します。

【テキスト・参考文献】

教科書は使わず、ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】

特にありません。教室でのディスカッションがあらたな知のきっかけになるかもしれません。

【プロフィール】

明海大学外国語学部教授。社会言語学、言語接触、アイルランド英語。

2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士（文学）。山形大学人文学部准教授などを経て、2014年4月より現職。著書に、『英語という選択-アイルランドの今』（岩波書店 2016年）、*English in Ireland: Beyond Similarities*（溪水社 2010年）、共編著に『英語の学び方』（ひつじ書房 2016年）。主な論文として“Speakers’ awareness and the use of *do be* vs. *be after* in Hiberno-English”, *World Englishes* 35, 2016年など。

火曜日

～母語話者としてく日本語らしさ>とは何かを考える～**認知言語学Ⅱ** 内容は通年講座(15-16頁)を参照。

池上 嘉彦 (いけがみ・よしひこ)

東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授

～音声の多様性とその背後にある仕組みの整然さを知る～**音声学の基礎的知職**

齋藤 純男 (さいとう・よしお)

東京学芸大学教授

【音声学】

人間が言葉と話しているときに発する音を音声といいます。世界には何千もの言語が話されており、その音声は驚くほど多様です。しかし、人間が音声を発するために使用する器官は同じなので、背後にある仕組みは共通しています。

この講義では、人間が使用する言語音の全体像をとらえると同時に、個々の音について特にその産出の仕組みに重点をおいて学びます。さまざまな音を実際に発音する練習も行ないますが、音声そのものについて理解することが中心となります。時間的余裕があれば、アクセントについても触れます。

【テキスト・参考文献】

特定の教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。参考文献は随時指示します。

【この課目で前提とされる知識など】

復習にきちんと時間を取れる人であれば、予備知識は必要ありません。

【プロフィール】

東京学芸大学留学生センター教授

東京外国語大学大学院修士課程修了

専門：音声学、アルタイ言語学

著書：『日本語音声学入門』（三省堂、1997）、『コンピュータ音声学』（分担執筆、おうふう、2001）、『朝倉日本語講座3 音声・音韻』（分担執筆、朝倉書店、2003）、『新版 日本語教育事典』（分担執筆、大修館書店、2005）、『言語学入門』（三省堂、2010）、『音声学基本事典』（共編著、勉誠出版、2011）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、他。

水曜日

～「文」とは意味の単位か、言語活動の単位か。両面で考える～

日本語文法理論 内容は通年講座(17頁)を参照。尾上 圭介 (おのえ・けいすけ)
東京大学名誉教授

～幼い子どもがことばについて何を知っているのかを探る～

第一言語獲得郷路 拓也 (ごうろ・たくや)
津田塾大学准教授
【言語心理学】

人間の子どもは、自分の周りで話されている言語を、意識的な努力や特別な訓練なしに自然に身につけます。これは自然界の驚異のひとつと呼んでいい現象ですが、その過程で一体何が起きているのかを明らかにするのは容易なことではありません。ここ数十年の言語学・心理学研究は、第一言語を獲得中の子どもの中で起きていることを探るため、様々に工夫を凝らした実験手法を編み出してきました。それらの実験研究から得られた結果を基に、少しずつ輪郭が浮かび上がってきた言語獲得のメカニズムは、驚嘆すべき精緻さをもっています。本講義では、0歳～4歳程度までの言語発達過程を辿りながら、これまでの実験研究が、人間の言語獲得のメカニズムについてどんなことを明らかにしてきたのかを概観します。具体的には、生後数日の新生児の言語弁別・6ヶ月～12ヶ月の乳児の音素対立弁別・1歳以降の語彙習得における即時マッピングと語彙学習バイアスなどについて取り上げます。

本講義は特別な基礎知識を前提とせずに進めますが、大学学部の「言語学入門」レベルの基礎知識(例えば、「音素」といったら何のことだかわかる)と、心理学統計に関する基礎知識があれば、内容理解に大きな助けとなるでしょう。

【テキスト・参考文献】論文リストを授業の中で配布します。

【この課目で前提とされる知識など】

「言語学入門」レベルの、言語学に関する基礎知識があることが望ましい。

【プロフィール】

津田塾大学学芸学部英文学科 准教授

第一言語獲得・統語論・意味論

2007年メリーランド大学大学院博士課程言語学科修了、Ph. D.

主要論文: Acquisition of scope. *Handbook of Japanese Psycholinguistics*, 149-180. Logical connectives. *Oxford Handbook of Developmental Linguistics*, 547-564 など。

木曜日

~人間の言語の普遍性と多様性について理解を深める~

生成文法Ⅱ

今西 典子（いまにし・のりこ）

東京大学名誉教授

【生成文法】

本コースでは、1980年代以降の生成文法理論研究の基盤をなす「UGへの原理とパラメータのアプローチ」での「統率と束縛の理論」から「ミニマリスト・プログラム」への進展の軌跡を踏まえ、人間の言語にみられる普遍性と多様性はどのように記述・説明されるのかという問題を考察する。句構造、移動、局所性、コントロール、束縛、削除、量化・作用域等に係る言語事象についてのさまざまな言語の研究成果を概観しながら、UGの内部構成に関するいろいろな仮説・提案について検討する。授業は、講義・セミナー形式で行う。

【テキスト・参考文献】

参考資料は適宜配布し、随時参考文献等を紹介する。

【この課目で前提とされる知識など】

受講には、生成文法Ⅰ（入門）で学んだ（あるいはそれに相当する）知識を前提とする。

【プロフィール】

東京大学名誉教授

理論言語学・英語学（生成文法（統語論・意味論）、言語獲得理論）

1977年東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専門課程（博士課程）単位取得退学

『照応と削除』（共著、大修館書店、1990）、『文Ⅰ』（共著、研究社、2000）、『言語研究入門：生成文法理論を学ぶ人のために』（共著、研究社、2002）、『言語の獲得と喪失』（共著、岩波書店、2005）『はじめて学ぶ言語学』（共著、ミネルヴァ書房、2009）など。

木曜日

～理論と実践から学ぶフィールド言語学～

フィールド言語学

長屋 尚典（ながや・なおのり）

東京外国語大学講師

【言語学特殊講義】

フィールドメソッドは自然で客観的な言語データを収集し分析する方法であり、この方法を用いる言語学をフィールド言語学と言います。日本語・英語から危機言語まで言語を問わず、理論的枠組みに関わらず、科学的研究の基礎となるデータを集め、整理し、分析します。100年以上の伝統を持つ言語学の方法論であると同時に、今世紀になって理論的問題が活発に議論されている最前線の分野でもあります。日本ではあまりなじみがないかもしれませんが、世界の大学院では必修の授業です。この授業ではそんなフィールド調査法の基礎を理論と実践の両方から学びます。

【テキスト・参考文献】教科書は使わず、ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介いたします。

【この課目で前提とされる知識など】フィールドワークには言語学全般の基礎が必要である。少なくとも言語学入門レベルは前提とする。自分の知らない言語の音声を聞く必要があるため、音声学の知識は特に必須である。

【プロフィール】

東京外国語大学総合国際学研究院講師

PhD in Linguistics (Rice University, 2011)

オーストロネシア諸語、フィールド言語学、言語類型論

主要著作・論文: *Japanese/Korean Linguistics*, Volume 22 (2015, CSLI Publications; Mikio Giriko, Akiko Takemura, Timothy J. Vance との共編著), 「ラマホロット語の自他交替」(『有対動詞の通言語的研究』くろしお出版, 2015), “Ditransitives and benefactives in Lamaholot” (*Argument Realisations and Related Constructions in Austronesian Languages*, 2014) など。

金曜日

～静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す～

文法原論 内容は通年講座(19頁)を参照。梶田 優(かじた・まさる)
上智大学名誉教授

～ラレル形の分析から文法の面白さへ～

日本語文法：受身文・ラレル文川村 大(かわむら・ふとし)
東京外国語大学教授
【言語学特殊講義】

個別の文法形式についてやや深く掘り下げて考えることで、文法研究の様々な面白さに出会ってもらおう。

今回は、「動詞+レル・ラレル、ル・ラル等」の形(以下、「動詞ラレル形」とその周辺諸形式(見える、聞こえる、など)をとりあげる。周知のようにこれらの形式は「受身・自発・可能」などの意味を表す多義形式であるが、それだけでなく、表す意味ごとに格表示の様式が多様である。この、意味と格表示の両面にわたる複雑さをどう理解したらよいか。これは重要な問題だが、案外あまり考えられていない。例えば、いわゆる「受身文」をめぐるには既に膨大な議論が存在するが、近時の議論には動詞ラレル形が多義の形式だという観点が欠けており、そのことによっていくつかの問題が生じているように思われる。動詞ラレル形等を多義の形式として捉えるという観点から改めて見直すことによって、いわゆる「受身文」規定の見なおし、さらには日本語研究における「ヴォイス」概念の要否に至るまで、幾つかの指摘を行ないたい。日本語を専攻する人だけでなく、他動性、ヴォイスといったことに関心のある他言語専攻の人にとっても興味を持てる内容になろう。

現代語の分析が中心になる。必要に応じて古典語の例も挙げるが、知識が無くてもついていける内容にする。

【テキスト・参考文献】

教科書は使用せず、ハンドアウトを配布する。参考書は随時指定する。

【この課目で前提とされる知識など】

日本語学・言語学の入門程度の知識が必要である。古文の知識は前提としない。

【プロフィール】

東京外国語大学大学院教授

国語学(文法、文法論)。

1990年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士(文学)。

『ラル形述語文の研究』(くろしお出版、2012)、「動詞ラル形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について」(『国語と国文学』89巻11号、2012)「ラレル形述語文における自発と可能——古代語からわかること——」(『日本語学』32巻12号、2013)など。

後期 2018年10月1日～ 全10回（祝祭日の講義はありません）

時間：19:00～20:40（100分）

月曜日

～基礎から学ぶ生成文法理論～

生成文法 I（入門） 内容は通年講座（14頁）を参照。

高橋 将一（たかはし・しょういち）

青山学院大学准教授

～Langackerを読むー認知文法の基礎から最前線までー～

認知言語学 I

西村 義樹（にしむら・よしき）

東京大学教授

【認知言語学入門】

「日常の言語使用を可能にする知識の中で文法と意味はどのように関係しているのか？」という言語学の根本問題に対する認知文法の考え方を、この理論の創始者 Ronald W. Langacker の著作を正確に読み解くことを通して、多角的に検討する。その中で、「言語知識・文法・意味とは何か」をめぐる認知文法独自の考え方や対立する理論との本質的な違いが鮮明になるはずである。なお、扱う文献は受講生の興味関心も参考にして決める予定であるが、2016年と2017年に相次いで刊行された新著の3冊（の一部）も読んでみたい。

【テキスト・参考文献】

講義中に読み解く文献については講義中にコピーを配布する。必要に応じて、Langacker の著作以外の文献を取り上げる可能性もある。

【この科目で前提とされる知識など】

（認知文法を含む）認知言語学についての知識は前提としないが、受講前に西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（中央公論新社）を通読することをお勧めする。

【プロフィール】

東京大学文学部（言語学研究室）教授

専門は認知言語学、意味論、日英語対照研究。

1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。

『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学 I：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）、『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』（共著、中公新書、2013）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』（共編著、開拓社、2016）、『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』（共編訳、くろしお出版、2017）、『認知文法論 1』（編著、大修館書店、近刊）など。

火曜日

～母語話者として＜日本語らしさ＞とは何かを考える～

認知言語学Ⅱ 内容は通年講座(15-16頁)を参照。池上 嘉彦 (いけがみ・よしひこ)
東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授

～世界の多様な言語音を聞き分け発音し分け、正確に記述し、よりよく理解するための基礎的な訓練をする～

音声学の実践的技能中川 裕 (なかがわ・ひろし)
東京外国語大学教授**【音声学】**

この授業では、前期の音声学 A で学んだ基礎的知識を能動的に使う訓練をします。訓練は、調音音声学と音響音声学に関わります。調音音声学的訓練としては、IPA (International Phonetic Alphabet) の枠組みをもとにして、世界の言語で音素的な区別に用いられている多様な単音の (i) 聞き分け、(ii) 発音模倣、(iii) 模倣した発音の内省、(iv) 内省による音声特徴の特定の技能練習をします。それに加えて、音響音声学の初歩として、Praat (インターネットで容易に入手できる音声学ソフトウェア) を利用しながら、類似する音素と音素の間の音声的な差異や、同一音素の異音と異音の間の音声的な差異が、波形やスペクトログラムにどのように反映するかを読み取る実習も行います。音響信号の読み取りはスライドで示しながら練習を進めるので、ノートパソコンを持参する必要はありません。

この授業で取り扱う言語音は主として分節音で、最初に肺臓気流による子音、次に非肺臓気流による子音、最後に母音という順序で技能訓練を進めます。

この授業を通して得た実践音声学的技能は、音声学・音韻論的な記述の正確な読解によって理論的な考察をするためにも、言語音の歴史的な変化についてよりよく理解するためにも、言語の現地調査を自分自身で実施するためにも、音声学・音韻論の応用的研究をするためにも、役に立つはずです。

【テキスト・参考文献】

適宜プリントを配布します。

【この課目で前提とされる知識など】

前期の音声学 A (あるいはそれと同程度) の内容をすでに理解していることが前提となります。

【プロフィール】

東京外国語大学総合国際学研究院教授 ; PhD (Linguistics)

音声学、音韻論、音韻類型論、コイサン言語学

主要業績は下記のページをご覧ください。

http://www.tufs.ac.jp/research/researcher/people/nakagawa_hirosi.htm

水曜日

～「文」とは意味の単位か、言語活動の単位か。両面で考える～

日本語文法理論 内容は通年講座(17-18頁)を参照。尾上 圭介 (おのえ・けいすけ)
東京大学名誉教授

～言語哲学の主要な概念を具体例の分析を通して学ぶ～

言語哲学峯島 宏次 (みねしま・こうじ)
お茶の水女子大学特任准教授

【言語学特殊講義】

言語哲学は、理論言語学の中でも特に現代の意味論・語用論の発展と深く関係しています。哲学者・論理学者のフレーゲに始まる言語分析の手法は、その後、多様な展開を見せ、現在では言語哲学と意味論・語用論とは互いに切り離すことのできない魅力的な学際的領域を形成しつつあります。そこで扱われる言語現象は、“the” (ラッセル) のような歴史的にも重要なものから始まり、“ouch/oops” (カプラン) のような従来の枠にとらわれない表現まで、じつに多様なものとなっています。

この講義では、具体的な言語現象に基づいて、言語哲学の問題・考え方を導入します。特に、「文脈依存性」という概念を軸として、意味と指示、意味論と語用論の境界、真理条件の内容と非真理条件の内容、表意と推意、照応と前提といった、言語哲学の主要な問題や概念について学びます。これは言語哲学の分野で現在標準的な考え方の基本を学ぶと同時に、その基礎を問い直す試みでもあります。教科書が簡単に片付けてしまう問題を、できるだけ丁寧に考え直してみましよう。

【テキスト・参考文献】

特定の教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。参考文献は随時指示します。

【この課目で前提とされる知識など】

言語学や哲学に関する予備知識は必要としません。幅広い関心からの参加を歓迎します。

【プロフィール】

お茶の水女子大学 シミュレーション科学・生命情報学教育研究センター 特任准教授

専門は、言語哲学・意味論・語用論・論理学。2008年慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学専攻）単位取得退学、博士（哲学）。

『名詞句の世界』（共著、ひつじ書房、2013年）、『岩波講座哲学 第三巻 言語／思考の哲学』（共著、岩波書店、2009年）、『論理の哲学』（共著、講談社、2005年）、W.ライカン『言語哲学—入門から中級まで』（共訳、勁草書房、2005年）など。

木曜日

～語形成のしくみから言語の本質を理解する～

語形成とレキシコン

杉岡 洋子（すぎおか・ようこ）

慶應義塾大学教授

【形態論・語形成論】

「複合語は言語の初期状態を示す化石である」（ジャッケンドフ）と言う説があるが、語という単位が示す「静」と「動」は、実は言語そのものがもつ本質的な二面性をあらわしている。なぜならば、語はレキシコン（心的辞書）に記憶されることによる「語彙性」をもつ一方で、複合語（wheel chair, 車イス）や派生語（sing-er, 歌い-手）の形成には、句や文と共通して構造の回帰性や意味の構成性といった「規則性」が観察されるからである。このため、語形成がレキシコンや統語部門および意味部門とどう関わるかという問いは、文法モデルを左右する大きな争点となってきた。また、心理言語学や脳科学の手法を使った実証研究では、「記憶」と「規則（計算）」という二つの心的メカニズムの解明が進んでいる。

この講義では英語と日本語の語形成のうち、動詞、形容詞、名詞の派生や複合といった、新語を造り出す生産力が比較的高い現象を取り上げ、その形式と意味の規則性がレキシコンに含まれる語彙情報との関連においてどのように説明できるかを考えていく。語についての私達の知識を扱うレキシコンの構造と役割については、生成文法（ミニマリスト理論）や認知言語学（たとえば構文文法）などでさまざまなアプローチが取られている。ここではどのような理論においても必要となる一般化を意識しつつ、語彙概念意味論、生成語彙理論などによる分析をとおして語形成のしくみや他の文法現象との関わりを考えていきたい。

講義に加えて、いくつかのトピックについて課題を出して議論する機会も設ける予定なので、ぜひ積極的に参加して、自分で言語データを集めて分析する楽しみも味わってください。

【テキスト・参考文献】

プリントを配布します。参考文献は、伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』（研究社）その他、必要に応じて教材を配布。

【この課目で前提とされる知識など】

専門的な予備知識は特に必要としない。日本語や英語以外の言語を専攻する方も含め、幅広い専門や背景の受講生を歓迎する。

【プロフィール】

慶應義塾大学経済学部教授（英語・言語学）／言語文化研究所副所長

形態論（語形成、語彙意味論、レキシコンと統語・意味の関わり、語形成の心的脳内メカニズム）

シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了(Ph. D.)『語の仕組みと語形成』（共著、研究社、2002）、『名詞の意味と構文』（分担執筆、大修館、2011）、「語の処理の心的・脳内メカニズム」（共著、朝倉日英対照言語学シリーズ4『形態論』、2016）など。

～言語について、なにを調べればなにがわかるのか～

実験言語学

酒井 弘（さかい・ひろむ）

早稲田大学教授

【言語学特殊講義】

科学研究の各分野では、取り組む問いの性質に応じて最適な研究方法を探すのがあたりまえの考え方です。ところが言語研究の分野では、このあたりまえの考え方が共通認識になっているのか、ときどき疑問になることがあります。この講義では、コーパスの計量的分析、母語話者の内省的直感の分析など、言語学研究者にとってなじみが深い方法から、視線や脳機能の分析といった比較的新しい方法までを取り上げて、それぞれの方法で「なにがわかるのか」考えていきます。あなたが知りたい疑問の答えを探すのにはどの方法が最適なのか、いっしょに考えてみませんか？

【テキスト・参考文献】適宜プリントを配布します。

【この課目で前提とされる知識など】

特に前提とする知識は想定していません。

【プロフィール】

早稲田大学理工学術院教授

カリフォルニア大学アーヴァイン校大学院修了（Ph. D. , 1996）, 2015年から早稲田大学理工学術院教授。ことばを聞くとき・話すとき、わたしたちの脳の中でなにが起きているのかという問いに、人間の行動、視線、脳波などを手がかりとして答えようとしています (<http://www.celese.sci.waseda.ac.jp/faculty/sakai>)。

金曜日

～静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す～

文法原論 内容は通年講座(19頁)を参照。

梶田 優

上智大学名誉教授

～「意味」の意味を掘り下げる～

意味論の基礎

酒井 智宏(さかい・ともひろ)

早稲田大学准教授

【意味論】

意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。その理由の一つは、ただの「意味論」という分野が存在しないことです。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc. であって、「意味論」ではありません。いずれも意味という同一の対象を扱っているように見えながら、XX 意味論と YY 意味論では着眼点が大きく異なり、XX に注目することが必ずしも YY を理解するための助けにならないこともあります。この講義では、どの立場に立つにせよ、意味について最低限心得ておきたい問題をじっくり考えてみましょう。

【テキスト・参考文献】

プリントを配布します。参考文献は、授業中に紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】

予備知識は必要ありません。

【プロフィール】

早稲田大学文学学術院准教授

意味論、語用論

2003年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術)

2004年パリ第8大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage

主要著作：『最新理論言語学用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2017)、『理論言語学史』(分担執筆、開拓社、2017)

通年講座 (前期と後期でセットの講座)

前期 2018年5月14日～ 全10回

後期 2018年10月1日～ 全10回 (祝祭日の講義はありません)

時間: 19:00-20:40 (100分)

月曜日

～基礎から学ぶ生成文法理論～

生成文法 I (入門)

高橋 将一 (たかはし・しょういち)

青山学院大学准教授

【生成文法入門】

人間の言語知識についての理論である生成文法理論を基礎から学んでいきます。まず、生成文法理論の研究目標、研究アプローチ、言語の分析方法、理論的概念・道具立てなどを体系的に学習します。その後、移動や削除といった具体的な言語現象を検討することで、言語や理論への理解を深めていきます。また、講義では可能な限り練習問題を考えていく予定です。実際に自ら練習問題を解くことで、言語の分析能力や理論を構築する能力を養っていきます。

【テキスト・参考文献】

下記の本をテキストとして使用する予定です。

Freidin, Robert. 2012. *Syntax: Basic Concepts and Applications*. Cambridge University Press.

【この課目で前提とされる知識など】

基礎から生成文法理論を学びますので、前提とされる知識はありません。

【プロフィール】

青山学院大学文学部英米文学科准教授

統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス

2006年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学学科修了、Ph. D.

主要論文: The hidden side of clausal complements. *Natural Language & Linguistic Theory* 28:343-380、
More than two quantifiers. *Natural Language Semantics* 14:57-101 など。

～母語話者として＜日本語らしさ＞とは何かを考える～

認知言語学Ⅱ

池上 嘉彦（いけがみ・よしひこ）

東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授

【認知言語学】

下記の書物^(注1)をテキストとして、それに沿って日本語の文法・語法に関する諸問題をとりあげ、認知言語学的に考えるとはどういうことを学ぶ。ある文法形式なり、語法なりの使用例を蒐集、検討し、そこに共通の意味的特徴を求めて定義するという客観主義的な試みの限界^(注2)を越え、言語における＜意味＞とは、話者がある事態を言語化するのに先立って主体的に^(注3)行なう＜事態把握＞と呼ばれる認知的な営みを通して創出されるものという重要な発想転換に注目する。どの言語の話者でも、一つの事態をいくつもの異なるやり方で把握する能力を有するという普遍的な側面と並んで、異なる言語の話者の間では、どういう把握の仕方が好まれるかが異なりうるという相対的な側面のあることに留意しつつ、＜日本語らしさ＞とはどういうことを探る。テキストの各課は、1. これまで、2. しかし、3. 実は、4. さらに、という構成になっており、読者は取り上げられる問題点について従来の使い方にまず接した上で、それとの対比で認知言語学的な扱い方がどのようなことを学ぶことになる。言語の問題との取り組みに馴染んでもらえるよう、かなりの補足的説明を加えるので進度は速くない。最初に＜認知言語学＞についての一般的な説明をしたうえで、本年度は第2章（第5～15課）の第7課からと第3章（第16～21課）を中心に取りあげる予定。認知言語学の予備知識は特に必要とするものではない。

テキスト：近藤安月子・姫野伴子編著『日本語文法の論点43』（研究社、2012）。

参考書：池上嘉彦・守屋三千代編著『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』（ひつじ書房、2009）関連して参照する資料、論考等はその都度コピーして配布する。

^(注1) 本書は、次のように題された6つの章（各章は4～10個の課から成る）で構成されている：

- | | |
|--------------|-------------|
| 第1章 発話の原点 | 第4章 情報構造 |
| 第2章 空間・時間の把握 | 第5章 事態への態度 |
| 第3章 現場性 | 第6章 聞き手への態度 |

章立てからは、文法項目、語彙項目など、使われる言語の側からの分類ではなくて、発話の場において言語の使用者として活動する話者の側に焦点を当てたものになっていることが読みとれる。

^(注2) 伝統的な扱いでは、例えば「ノダ」の用法として＜断定＞、＜説明＞、＜命令＞といった項目が列挙されていることがよくある。記述ということでは誤りではなからうが、日本語非母語話者にこれを「ノダ」の定義として教えたからといって正しい使い方ができるようになるとは、とても考えられない。必要なのは、話者がどのような事態把握の仕方をする際に「ノダ」の使用に至るのか、という手続き的（procedural）な過程に焦点を当てた説明である。まず、典型的（prototypical）と目される用法に注目する。そこでは、ほぼ次のような過程の起こっていることが確認できよう：(i) ある予想外の事態への気づき〔例えば、道

が濡れている] → (ii) 自らへの問いかけ [なぜか] → (iii) ある経験則の想起 [雨が降れば、道が濡れる] → (iv) その経験則に基づく推論で結論へ [雨が降ったのだ]。その上で、その典型的な用法がどのような認知過程を経て他の用法へと派生、展開していったかについての説明へと進むことになる。

ここまで考えてくると、「ノダ」の使用を支えているのは「仮説的推論」(abduction)と呼ばれる認知過程であることが分かる。これは「演繹」(deduction)と「帰納」(induction)と並ぶもう一つの推論形式とされる。(ただし、「仮説的推論」で依拠される経験則はあくまで一つの「仮説」であり、必ずしも問題の場合に妥当するとは限らない。(例えば道が濡れているのは降雨のためではなく、誰かが水をまいたのかもしれない。)とはいえ、それは人間が自らの周りの世界を理解し、知識を広げていくのに欠くことのできない認知的な活動なのである。(その他にも、例えば助詞「ガ」の重要な用法の一つは<総記>であるとか、<回答提示>であるとか、という「説明」を考えてみるとよい。記述的には間違いではないとしても、このような情報の提示で非母語話者が日本語の助詞「ガ」の適切な用法を体得できるはずはない。)

(注3) 話者にとっては、発話に際して、ある事態をどのように認知的に処理するかに関しては、事実上無限の選択肢がありうるはずである。話者はその中から場面を考慮しつつ、自らの発話の意図にもっともよく適うものを選ぶことになる。極めて短い時間のうちに自らの発話の意図との関係で何が関連性(relevance)があり、何がないかを自らが判断し、それを踏まえて言語化へと進むのである。話者は言語の「規則」に支配されるままに振る舞うだけといったような存在ではない。自らの立場から自らの責任において判断するという意味で、話者はすぐれた意味で<主体的>(subjective)に振る舞う存在(*sujet parlant*)なのである。

【この課目で前提とされる知識など】

認知言語学の予備知識は特に必要とするものではありません。

【プロフィール】

東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授、日本認知言語学会名誉会長
 東京大学で英語英文学(B. A., M. A.)、Yale 大学大学院で言語学(M. Phil., Ph. D.)を専攻。インディアナ大学、ミシガン大学、ベルン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、マサリク大学(チェコ:ブルノ)、マグヌス・ヴィタウタス大学(リトアニア:カウナス)、タシケント東洋大学(ウズベキスタン)で客員教授、ハンブルク大学、ロンドン大学、などで客員研究員。著書:『英詩の文法』、*The Semological Structure of the English Verbs of Motion: A Stratificational Approach*、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』、『ことばの詩学』、『詩学と文化記号論』、『記号論への招待』、『ことばのふしぎ・ふしぎなことば』、『<英文法>を考える』、『日本語と日本語論』、『自然と文化の記号論』、『英語の感覚・日本語の感覚』など。編著: *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*、など。論文:(認知言語学関係の最近のものについては)“‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’: A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation” (*Journal of Cognitive Linguistics* [『認知言語学研究』] 1)とその‘References’参照、ほか多数。翻訳:S. ウルマン『言語と意味』。R. クワーク、他『現代英語文法』、B. L. ウォーフ『言語・思考・現実』、U. エーコ『記号論 I, II』、など。(以下、共訳)A. ダンダス『民話の構造』、G. N. リーチ『語用論』、G. レイコフ『認知意味論』、F. ウンゲラー他『認知言語学入門』、ほか。

日本語文法理論

見出し：「文」とは意味の単位か、言語活動の単位か。両面で考える

尾上 圭介（おのえ・けいすけ）

東京大学名誉教授

『文成立論の二種とモダリティ論』—日本語学文法論の学史のおもしろさ—

○「文」はどのような構造を持って成立するか。述語においてこそ文が成立するという感覚が生じるのは、何ゆえか。そういうことを突き詰めて考えていく領域が文成立論と呼ばれている。文成立論は当然、言語とは何かという根本問題を正面から問うことになる。

○文成立論には、大きく見て二種類のものがある。第一種は「述語の統覚作用が文を成立させる」という山田孝雄に始まる考え方であり、第二種は「文末辞（助動詞と終助詞）の主目的作用が文を成立させる」という時枝誠記に始まる議論である。

○第二種の文成立論は「（戦後）陳述論」と呼ばれることもあるが、時枝（1941）自身が文法論として精密化しなかったこともあって、渡辺実、南不二男らの精緻な議論を喚び起こした。文の意味の多層性を語る最近の仁田義雄、益岡隆志らのいわゆる階層的モダリティ論も、この第二種文成立論の線上にあると言ってよい。モダリティを「発話時の話者の捉え方、主観が文法形式によって表現されたもの」と捉える仁田らの見方（B説モダリティ論）は国語学特有のものと言えるが、それは時枝、渡辺の文成立論が国語学特有のものであることと直接につながっている。

○一方、第一種文成立論を根幹とする山田文法（1908, 1936）の述語論では、複語尾（いわゆる助動詞）は動詞を述語たらしめる叙法形式として位置づけられる。叙法形式は、経験的内容（事実界既実現の内容）を語るものと非経験の内容（事実界未実現および観念領域の内容）を語るものとに区分されており、後者が今で言うモダリティ形式に相当する。モダリティを「非現実領域の事態を語るときに表れる意味」（A説モダリティ論）だとする尾上の見方は明治時代以来の山田文法の叙法論の精神を承け継いでおり、現在の Langacker らの modality と同じものである。山田文法には西洋の哲学、言語学の伝統が流れ込んでいる。

○第一種、第二種の文成立論と、A説、B説のモダリティ論との深いつながりが見えてくると、現在の日本語学のモダリティ論の混沌、あるいは日本語学と外国語学のモダリティ論の乖離の理由が理解される。山田孝雄やその流れをくむ川端善明、尾上圭介らの文法論では文を意味の基本的単位と見ており、一方、時枝誠記から渡辺実、仁田義雄に至る文法論、B説モダリティ論では文を言語活動の単位として見る傾きが強い。これは、一方の考え方が成り立てば他方が成り立たないというような関係にはない。文を、あるいは言語を、意味（文に内在する判断）と言語活動の両面で考えるところに、日本語文法論の学史の豊饒さが見えてくるであろう。

○この講義を受けるための予備知識は要らない。いわゆる理論的な国語学文法論の全学史を通観しようするような今年度の講義では、本来読むべき文献は多いが、最小の労力でそれぞれの学説の精神が理解できるように精選して文献を紹介する。

【テキスト・参考図書】

参考文献については講義中に紹介する。

【この課目で前提とされる知識など】

予備知識は特に必要ない。新しい考え方に出会うことへの好奇心と意欲さえあれば。

【プロフィール】

東京大学名誉教授

大阪市生まれ。博士（文学）専攻は文法論、意味論、文法史、および「大阪のことばと文化」。日本笑い学会理事。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。著書に『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版、2001）、『大阪ことば学』（岩波現代文庫、2010）、『朝倉日本語講座 第6巻（文法Ⅱ）』（編著、朝倉書店、2004）、日本語文法学会編『日本語文法事典』（共編、大修館書店、2014）など。

金曜日

～静態的・出力説的な文法観に対する動態的・過程説的な文法観の必要性を示す～

文法原論

梶田 優（かじた・まさる）

上智大学名誉教授

【言語学特殊研究】

最近数年間の理論言語学研究の実質的な部分を整理、吸収しつつ、動的文法理論の構築を進める。（１）品詞、機能範疇、構文などの多様性と画一性、（２）述語構造・論理構造・情報構造・発話行為の四者の統語形式への写像における相互作用、（３）表現手段の線状性の文法への影響、等々を体系的に説明するためには、現行の静態的・出力説的な言語理論では不十分で、動態的・過程説的な視点が必要になることを示す。個別言語研究、言語類型論、通時言語学、言語心理学などから資料を採る。神経科学、発生生物学、比較動物学、言語進化論などの成果を援用する。（春期講座で動的文法観の基本を説明する。）

【テキスト・参考文献】

参考文献については講義中に紹介する。

【この課目で前提とされる知識など】

授業は講義形式。「生成文法入門」程度の予備知識が望ましいが、トピックごとに基礎を簡単に復習してから話を進めるので、入門未修者も（面接ガイダンスのうえ）受講可。

【プロフィール】

上智大学名誉教授 英語学、言語学

1967年プリンストン大学 Ph. D. (言語学)。東京教育大学、東京学芸大学、上智大学で英語学、言語学を担当。『文法論Ⅱ』（共著、大修館、1974）、「生成文法の思考法(1)－(48)」(『英語青年』、研究社、1977-1981)など。

理論言語学講座夏期集中

期間：

語用論 2018年8月10日（金）～12日（日）

日本語文法と一般言語理論 2018年8月31日（金）～9月2日（日）

時間：1日目 13：00～18：30 2日目 10：00～18：10 3日目 10：00～16：10

～現代のグローバル社会を生きる上で必要なコミュニケーション力とは何か～

語用論

松井 智子（まつい・ともこ）

東京学芸大学教授

【語用論】

語用論、心理学の視点から、言語コミュニケーションのメカニズムを検討します。関連性理論の基本的な概念について学習しながら、語用論が扱う主な言語現象を把握します。また、言語コミュニケーションに必要な能力がどのように発達するのかについて、コミュニケーションの障害も視野に入れながら、検討します。さらに、学習したことをもとに、現代のグローバル社会を生きる上で必要なコミュニケーション力とはどのようなものかについて、皆さんと考えたいと思います。

【テキスト・参考文献】

松井智子著『子どものうそ 大人の皮肉』（岩波書店、2013）。

【この課目で前提とされる知識など】

とくに前提とされる知識はありません。

【プロフィール】

東京学芸大学国際教育センター教授

1995年英国ロンドン大学大学院修了、Ph.D（言語学）。関連性理論を枠組みとした研究に取り組むとともに、実験的な手法を用いて、語用論の発達と障害について研究をしている。著書に Bridging and Relevance (John Benjamins, 2000, 市河賞)、『子どものうそ、大人の皮肉』（岩波書店 2013年）、『ソーシャルブレインズ』（分担執筆、東京大学出版会、2009）、『ミス・コミュニケーション』（分担執筆、ナカニシヤ、2011）などがある。

～日本語の具体的な言語事実の観察，記述から，理論的な説明へ～

日本語文法と一般言語理論

三宅 知宏（みやけ・ともひろ）

大阪大学准教授

【言語学特殊講義】

本講義は、普遍的な一般言語理論を視野に入れながら、個別言語としての日本語について、特に「文法」（形態論、統語論、意味論、語用論との接点を含む）の分野を中心に、議論します。具体的には、日本語の言語としての普遍性と個別性を考える上で興味深いデータが観察できる、「使役性」、「非対格性」とその関連分野の問題を取り上げる予定です。なお、本講義は、日本語の「文法」に関して、①一般言語理論研究を行う上での基礎的な知識を得たい方、②日本語教育を行う上での知識を得たい方、③専門的な日本語研究を進める上での知識を得たい方、④知的興味がある方、を対象としています。

【テキスト・参考文献】

適宜プリントを配布します。

【この課目で前提とされる知識など】

本講義は、受講にあたっての特別な知識は必要としません。もちろん、専門的な知識を既に持つ方の受講も歓迎します。

【プロフィール】

大阪大学大学院文学研究科・文学部 准教授

日本語学・言語学

1997年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学 博士（文学）

『日本語研究のインターフェイス』（くろしお出版 2011），『日本語と他言語』（神奈川新聞社 2007），『語彙論的統語論の新展開』（共編著 くろしお出版 2017），「日本語の発見構文」（『構文の意味と拡がり』くろしお出版 2017）